

豊かな母性を発揮できる教師になろう！

一人で抱え込まないことが大事、でも、しっかり抱えることはもっと大事なこと

あなたが担任している学級の子が、ある時期から不登校や別室登校など、自分の教室に入れなくなったとき、あなたはどんな対応に重きを置きますか？

次の5つの対応について、日ごろの自分の行動や考えをもとに、重きを置く順に並べてみてください。
下の表し方の例にならって、番号を、>、= で結んでみましょう。

- 1： 学校や教室に行きたくない気持ちに負けずに、少しでも登校し、授業を受けるよう働きかける。
- 2： 本人の気持ちに寄り添って、無理をしないようにいたわる。こまめに足を運んで面倒を見る。
- 3： 何が原因で、どのように対処すればよいのか、情報を収集して分析的に戦略を練って行動する。
- 4： 自分の中に湧き起こる喜怒哀楽の感情を、その子や学級に対して投げかけ、熱く語りかける。
- 5： 本人や保護者の要求、あるいは学校・学年の意向に沿って行動することを優先する。

(表し方の例： 1 = 4 > 2 = 5 > 3)

さて、あなたは？

これには、とくに正解があるわけではありません。ぜひ、近くの先生方の考えと比べてみてください。

老若男女を問わず、人の心には次の5つの側面があると言われています。

- 1は、規則や慣習を守り、社会的な機能を重んじる厳格な親心の側面 (Critical Parent = CP)
- 2は、心優しく受け入れて面倒を見る、保護的な親心の側面 (Nurturing Parent = NP)
- 3は、感情に流されず、論理的・合理的に思考する理性的な大人心の側面 (Adult = A)
- 4は、自分の感情や意思を素直に発揮する自由な子ども心の側面 (Free Child = FC)
- 5は、相手の感情や意向をうかがい、順応する子ども心の側面 (Adapted Child = AC)



それぞれの心の側面に、善悪の区別はありません。どれ一つとっても、社会生活を営む上で、大事なものばかりです。

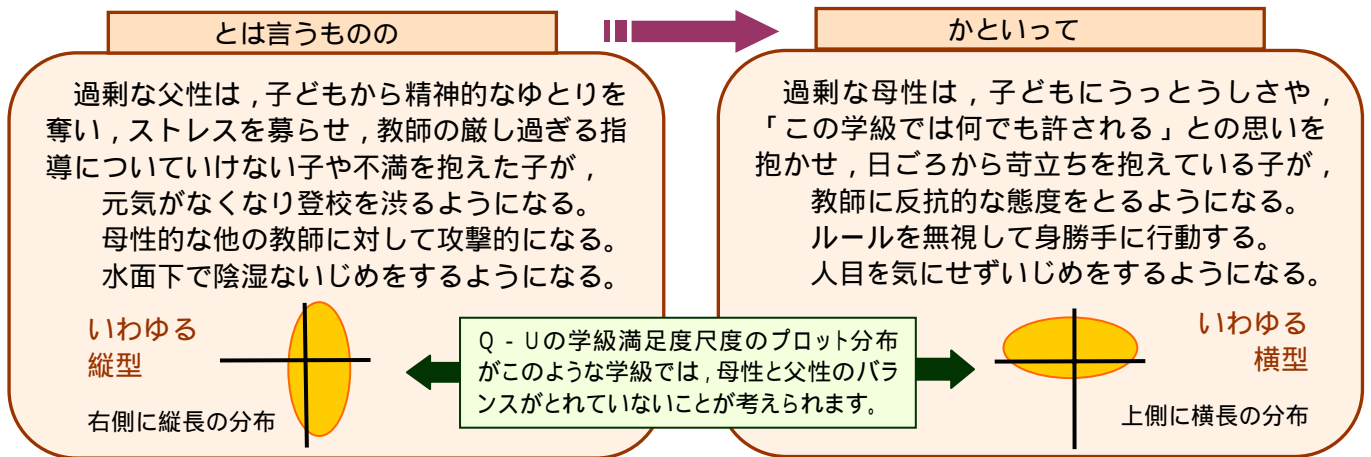
それぞれの側面の強さの度合いを、折れ線グラフなどの図に表した場合、その形は一人一人異なってきます。「心の指紋」とも言えるものです。

ただし、強過ぎる側面や、弱過ぎる側面があると、そのことによる弊害が、子どもや保護者との人間関係の中で生じやすくなり、自分でも気付かないうちに相手を傷つけてしまったり、結果的に自分が損をしたりしてしまいます。教育のプロとしては、自分の傾向を理解し、意識的にバランスを保つことが大事なのです。

5つの側面の強弱の度合いを、調査票への回答をもとに図示したものを、エゴグラムといいます。調査票には、大人用と子ども用(小学生用・中学生用)があり、自己理解を深めたり、教師が子ども理解を深めたりするのに役立ちます。

さて、5つの心の側面のうち、CPは父性的な親心、NPは母性的な親心ともいうことができます。一般に教師は、職業柄、男女を問わず、他職種の人に比べるとCPが強い人が多いように感じます。子どもたちの一般的な発達の特徴から考えれば、小学校の学年が上がるにつれて、中学校ではさらにCPの発揮が必要となってきますので、それは当然のことです。とは言うものの

B面へ



不登校の子に対しては、母性中心の対応を

子どもの中で起こっていること

不登校や別室登校の子、不登校の傾向が見られる子の多くは、何らかのつまずきを体験して、心のエネルギーが短期間にひどく消耗してしまっているか、あるいは、家庭の養育機能が脆弱で、長期的にエネルギーが枯渇状態にあるために、発達の節目やある体験を機に、集団の中で活動するための力が湧いてこない状態にあるといえます。いずれも母性を求める強い気持ちが背後にあるのです。

初期対応をまちがえないで

そのような子に対して、現実原則に基づく父性的な指導（CPの発揮）を中心に行うことは、燃料切れの車を無理やり走らせようとするのに等しく、決してよい結果は得られません。中には、強い働きかけを行うことにより、「学校に行ってしまう（教室に入ってしまう）普通に生活することができ、何の問題も見られなくなってしまう子」もいますが、それはあくまで一時的な過剰適応によるもので、いずれまた不登校となってしまうたり、極端な赤ちゃん返り（退行現象）が現れたりするなど、問題が再燃する場合があります。そこで

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| まずは、温かく保護的な雰囲気でも性的にかかわることを基本とする。 | NPの発揮 |
| 家庭訪問では、指導者としての教師の役割にとらわれず、遊び心を持って臨む。 | FCの発揮 |
| その子の気持ちにフィットするよう、興味関心に沿って話や遊びに付き合う。 | ACの発揮 |
| 広く情報収集して行動の意味を検討し、教師自身が情緒の安定を保って接する。 | Aの発揮 |

このように、温かくかつ冷静な目をもってかわり、徐々に心のエネルギーがたまるようにします。情緒の安定と活動性の高まりが認められれば、具体的な行動に向けた働きかけを試してみます。

遊び・非行型の不登校、発達障害がある子の不登校の場合も、対応の基本は同じ

これらの子に対しては、どうしても父性的な対応が中心になりがちですが、多くは、愛情飢餓の状態が慢性化している、相手の言葉や仕草の中に、自分に対する敵対心や嫌悪感を察知し、反発心や疎外感、ときには恐怖感を根付かせてしまっていることから、やはりNPを十分に発揮して接することが基本となります。

その上で、問題行動に対する指導では、人格否定にならないよう、事実焦点を当てて冷静に対応することが必要であり、CPの発揮もさることながら、Aを發揮した対応が極めて重要なのです。

母性豊かな学校づくりの一環として 別室登校の仕組みづくりを

校内に特別な母性的空間、いわゆる別室登校の場を確保・運営している学校では、そのことによって不登校にならずにいられる子がいる一方で、別室登校の場が設けられていない学校では、行き場のない子がやむなく不登校となってしまう例が見受けられます。別室登校への対応には、教師の負担増や仕組みづくりなど、新たな困難や課題が生じますが、教室以外の居場所を用意しないままに相談機関や適応支援教室に送ることのないよう、校内で知恵を出し合い、学校としての抱えの機能(=NP)の向上を図ってください。